

# マシニスト

2005(平成17)年1月13日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=ブラッド・アンダーソン/出演=クリスチャン・ベイル/ジェニファー・ジェイソン・リー/アイタナ・サンチェス=ギヨン/ジョン・シャリアン/マイケル・アイアンサイド/ラリー・ギリアード/レグ・E・キャシー/アンナ・マッセイ (東芝エンタテインメント配給/2004年スペイン・アメリカ映画/102分)

……この映画は1年間、365日眠っていない男が主人公。そんなアホな！と思うものの、現実には体重を30kgもダイエットしてこの映画に登場した俳優クリスチャン・ベイルの薄気味悪い肉体(?)を見ていると、その恐さがひしひしと……。何が現実で何が夢なのか、何が本当で何が嘘なのか、ホントにそれがわからなくなったら、そりゃコワイ……。

## 夢いろいろ……

人間は誰でも眠っている間に夢を見ることがある生きモノ。医学的にどうかは知らないが、私が夢を見るのは何か気になることがある時が多く、すべてが順調に進んでいてノンビリしている時はあまり見ないように思う。

また私には、本来の意味での夢とは別に、半分睡眠状態でうつらうつらしながら、これをしよう、あれをしようと考えたり、原稿を書いていることがよくある。これは明け方に多いので、脳が半分目覚め、半分眠っている状態なのだろうと思う。こんな時は、せっかくだいいアイデアが生まれたり、良い文章が浮かんでいるのだから、メモしておかなければと思いつつ起き出せないことが多い。しかしそうすると、起き出した後、忘れてしまっていることも多く、せっかくのアイデアや文章を「ああ残念！」と思うこともしばしば……。

私の見る夢には大体自分の知っている人物のA君やB君そしてa子やb子が登場するが、そのストーリーは脈絡のないものがほとんどで、起きた後で考えてみれば、「なぜ、あいつが、あんな場面に……」と思うものばかり。現実の話とピ

ツタリ合うような夢を見ることはまずありえないものだ。このように、自分の見る夢の体験から考えてみても、夢はあくまで夢の中の世界であって、現実の世界とは全く異なるものだから、多少「変な夢」であっても安心できるもの。しかしそれは裏返すと、夢の世界と現実の世界の境目がわからなくなったら恐ろしいということの意味している。

そしてこの映画は、まさにそんな境目がわからなくなってしまったゾッとする世界を描いたものだから、そりゃコワイ……。

## 『インソムニア』との違いは？

「不眠症」をテーマとした映画は、アル・パチーノとロビン・ウィリアムズそしてヒラリー・スワンクという「3大アカデミー賞スター初競演」の『インソムニア』（02年）だが、ここでアル・パチーノが演じた腕利き刑事の不眠症は6日間！ そりゃ、人間にとってその程度が不眠症の限界だろう。ところがこの『マシニスト』では機械工の主人公トレバー（クリスチャン・ベイル）は、極度の不眠症のため1年365日間眠っていないという設定。

そんなことが医学的にありうるのかどうかは知らないが、トレバーの不気味なまでにやせ細った肉体を見ていると、それもありうるナと思ってしまうのがコワイ……？

## 頭の下がる役者根性だが……？

主人公のトレバーを演じたベイルは、この映画の役作りのため現実に63ポンド（約30kg）体重を落としたとのこと。パンフレットによると、脚本が途中で変更されて、「歩くガイコツ」のような男への要求がよりハードになったため、ベイルは「チキショウ」と脚本家を恨みながらも、その役づくりに励んだらしい。そのため、①頬はこけ、②目はくぼみ、③肩や腕の肉は全くなく、④あばら骨が透けてみえるという不気味な肉体が、CGを使わずして実現したわけだ。

ハリウッドの美人女優シャーリーズ・セロンは『モンスター』（03年）での役作りのために13kg体重を増やしたし、『シカゴ』（02年）ではレニー・セルヴィーガーが、『インサイダー』（99年）ではラッセル・クロウがそれぞれ体重を増やして

役づくりに挑戦していたが、この映画でのクリスチャン・ベイルの「激ヤセ」ぶりは超人的で、ここまでやるか、と唾然とするもの。その役者根性には頭が下がると一応誉めておくが、これはちょっと非人間的で非人道的……？

## 2人の女性から同じ言葉が……

この映画では、後述のように2人の女性が大きな役割を果たしている。面白いのはこの映画の前半においてこの2人の女性からトレバーに対して奇しくも全く同じ言葉が投げかけられること。その言葉は「Are you OK ?」というもの。そして、『なぜ（そんなことを聞くの）？』と答えるトレバーに対して、2人の女性は全く同じように「これ以上やせたら死んでしまうわ!」というセリフを……。まさにこの言葉がピッタリするほどにやせ細ったトレバーの身体はちょっと不気味。

## 1人は娼婦のステイービー

孤独で疲れ切ったトレバーが心の底から安らげるのは、娼婦のステイービー（ジェニファー・ジェyson・リー）と一緒にいるときだけ。不眠症で悩んでいる男が人並みに性欲をもつのかどうか医学的には知らないが、主人公トレバーにはそれがあるようで、ある意味ではステイービーはその欲望処理係。しかし肉体面での結びつきはほんの少しのウエイトであり、強いのは精神面での結びつき。いわば弱者同士、虐げられた者同士がその相互理解の上に、身体を寄せあっているわけだが、それしか心を安らげるものがないこの2人にとっては、次第にお互いがベストパートナーになってくるのは当然。

ステイービーには別れた亭主がおり、2人がベッドにいる時にも時々電話が入ってくるが、トレバーはそんなことは気にしていない……。2人の心の結びつきはついに、ステイービーが仕事をやめ2人で一緒に生活しようというところまで前向きになるのだが……？

## もう1人は空港のウエイトレスのマリア

職場でも真面目だが孤独な生活を送っているトレバーが安らげる場所は、ステ

イービーの部屋の他は、ここ空港の中にあるカフェ。カウンターだけのオープンカフェだが、トレバーの狙いはカウンターの中にいるウエイトレスのマリア（アイタナ・サンチェス＝ギヨン）とのちょっとした会話。長話をするわけではないが、このカウンターに座って1杯のコーヒーを飲むためだけにトレバーは毎日のようにここに通っていた。

マリアがこれを不思議に思いトレバーに興味を示したのは当然。マリアはニコラスという息子がいるシングルマザー。こんなマリアはちょっとした会話がきっかけとなり、「母の日」にはマリアが誘う形で、3人で遊園地へ行き、楽しい時間を過ごすことに……。ところが、楽しいことが続かないのがこの映画。携帯電話が入ったマリアを残してルート666という奇妙な乗り物に乗ったトレバーとニコラスの2人には、天国と地獄の別れ道が示され、地獄への道を選んだニコラスは途中で失神……？

もっともこれは、ニコラスが癲癇もちだったためで、大事には至らず、またトレバーとマリアとの間にヒビが入ることもなかったが……？

## 謎の大男アイバンとは？

この映画のストーリー（？）の中でキーマンとなる謎の男がアイバン（ジョン・シャリアン）。アイバンは、トレバーとしては今まで見た事もない顔だったが、赤い車に乗ったアイバンの説明によると、クビになった同僚の代わりに溶接工として働いているとのこと。

トレバーが工場の中で働いているとたしかにこのアイバンの姿が見え、目であいさつをかわすことに……。ところが、アイバンの奇妙な動作に気をとられたトレバーは、はずみで機械のスイッチを押してしまい、その結果同僚のミラー（マイケル・アイアンサンド）は右腕を失うことに……。そして、事故原因の調査が進む中、トレバーはアイバンなどという人物はこの工場の中にいない、という意外な事実を聞かされることに……。

「そんなバカな！俺はこの目でアイバンを見たし、話もした！」と信じるトレバーは、その後も再三にわたってアイバンとの接触を試みるが……。果たしてこのアイバンとは何者なのか？ また、実在している人物なのか、それともト

レバーが夢の中でつくりあげている人物なのか……？

## ハングマン・ゲームとは？

1人住まいのトレバーは、忘れてはいけない注意事項をメモ用紙に書いて、冷蔵庫のドアに貼りつけている。これはよくある習慣で、私の家の冷蔵庫のドアにもその類のメモやチケット類がいっぱい……。ところがこの映画では、なぜかその冷蔵庫のドアにハングマン・ゲームの用紙が貼りつけられていた。これは留守の間に誰かが部屋に入り込んで、と思うのは当然。したがってここからもややこしい問題が……？

ところでパンフレットには、ハングマン・ゲームとは「首吊り人形の絵が完成する前に、指定した単語の〈つづり〉を当てられれば勝ちとなる文字当てゲーム。子供が文字を覚える際にも使用されているアメリカで広く伝わるゲーム」と明確に説明されている。しかしこのゲームは、日本人には全然馴染みのないものだから、これはこの映画を理解するうえでのかなりのハンディキャップ……？

ちなみに、パンフレットにはその遊び方についても、「遊び方は、1つの単語を思い浮かべ、その単語の文字数分だけアンダーバーを引く。使われていると思われるアルファベットを指定し、それが実際に使われていれば、アンダーバーに文字が入り、使われてなければ人形が首を吊られていく。首が吊られるまえに単語をあてれば勝ち」と解説されているが、日本人にはこれでその面白さがわかるかな……？

## 不気味な音楽も効果的！

映画と音楽はその作品の良し悪しを決めるうえで切り離せないもの。もちろん、楽しい映画には楽しい音楽を、そして涙を誘う映画やラブストーリーには感動的な音楽を、というのが基本。それと同じように、ホラー映画には不気味な音楽が使われるし、効果音が使われることもよくある。すると、365日間眠っていない男がくり広げる不気味なストーリーを描いたこの映画の音楽は……？

それは、実際に映画館に足を運んであなた自身でじっくりと味わってもらいたいものだ。ピアノの単音を中心とするゆっくりとした音楽だが、それがこの映画

の緊張感を維持したり増幅するのに大きく役立っていることはまちがいない。こんな映画は自宅のビデオで観たのでは絶対ダメ。やはり映画館で音楽とともに味わわなければ……。

## ちょっとシャレたプロローグとエピローグ

この映画のプロローグとエピローグには同じシーンが登場する。それは、やせ細ったトレバーがむしろに巻いた死体らしきものを重そうにかついで、これを海に放り捨てようとしているシーン。果たしてこれは本当に死体なのだろうか？  
また、もし死体だとしたら一体誰のもの？

映画の冒頭に使ったシーンをラストでもう一度利用するという手法は時々見かけるものだが、この複雑怪奇なストーリー展開の映画では、これが非常に効果的で、ちょっとシャレていると私はみたが……？

## この映画の結末は？

この映画は、1時間42分という標準的な長さだが、結果的に始めから終わりまでずっと緊張感を持って観ることになるためか、ひどく疲れる映画。365日間眠っていない主人公トレバーが、やせ細った不気味な肉体を見せながら、あれこれと「奮闘」する姿をずっと観ているのは、結構つらいものがある。

もっともごく一部だけ、これほどまでにやせ細る前のトレバーの姿が登場する。そして、これがこの複雑怪奇な映画の結末を解くポイントになるのだが、それはヒ・ミ・ツ！

この映画の複雑なストーリー展開をじっくりと観察しながら、主人公トレバーと2人の女性との心の交流を味わってもらいたいし、アイバンを追うトレバーの心理もじっくりと考えてもらいたい。そしてこの映画の結末をどう評価するかについても、是非あなたの意見を聞きたいものだ……。

2005(平成17)年1月14日記